

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 16章1～18節

¹安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。²そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。³彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。⁴ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。⁵墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。⁶若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。⁷さあ、行って、弟子たちとベトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」⁸婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

イースターは「白い衣」で！【こども説教のために】

イースターおめでとうございます。わたしたちは皆、主のご復活を祝う教会へと集められてきました。40日と6主日を「受難節」として共に過ごしてきて、わたしたちは、主のご復活を共に喜ぶイースターに辿り着いたのです。

教会堂は、先週までとは打って変わって、イースターの装いになりました。玄関に入って来て、たくさんのイースターエッグに驚いた方もあるでしょう。礼拝堂の聖壇も、先週まで紫色の掛布が掛けられていましたが、今日は白色に代えられました。

牧師の装いも、これに合わせました。首から掛けるストールは聖壇の掛布と同じ色を使うことになっていますから、先週までの紫色ではなく白色になりました。そして、今日は普段着けている黒色のガウンではなく、白色のガウンを着けています（この白色のガウンは、隠退牧師の岳父から譲ってもらったのです）。

実は、イースターでも、白色のガウンを着けるとは限りません。イースターでなくても白色を着ることがあります。わたしたちの教団ではガウンの色に決まりはないので自由なのですが、わたしは、ある決まったときにだけ白色のガウンを着ることにしています。洗礼式のある日曜日です。洗礼式のある礼拝では白色を着ることにしているのです。今日は、第二礼拝で洗礼式を予定しているので、第一礼拝から白色のガウンを着ることにしました。

イースターにこの白色のガウンを着ることが、わたしは何よりもうれしいのです。本当は、皆さんにも「イースターは白い服を着て来ましょう」と呼びかけたいと思っています。イースターには「白い服」が似合うからです。

主イエスが十字架で死なれて墓に葬られた金曜日から三日目の日曜日の朝、最初のイースターに招かれた弟子たちがいました。女の弟子たちです。招かれたところは、主イエスが葬られていたはずの墓です。朝早く女の弟子たちは油と香料を持って墓に行きました。亡くなって葬られている遺体のための油と香料です。けれども、それは不要となりました。墓に遺体が無くなっていたからです。その代わりに、白い衣を着た人がいました。**白い長い衣を着た若者**が墓の中に座っていたのです。そして、その白い衣を着た人は告げたのです、「イエスさまはご復活なさって、ここにはいらっしやいません」と。

これが、最初のイースターです。そして、教会が記念し祝うイースターです。皆さんを、この白い衣を着た人のお招きしました。皆さんに、主のご復活を告げる声をお聞きいただくためです。皆さんを、ご復活された方のところへとご案内するためです。いいえ、皆さんにも、わたしと一緒に白い衣を着て、あの墓の中でご復活を告げた人と共に、イースターを祝う人々をお迎えしていただきたいのです。

「若者」になる！

あの墓の中でご復活を告げた人を、みなさんは、「ああ天使か」と思われたかもしれません。白い衣を着て神のご計画を告げる者と言えば、「天使」というのが定番です。確かに、この人は「天使」だったと伝えている福音書もあります。けれども、先ほど朗読を聞いた福音書では、どこにも「天使」とは言われていませんでした。ただ「**白い長い衣を着た若者**」と言われているだけでした。「若者」です。

わたしは、皆さんに「この若者のようになる」ことをお勧めしているのです。イースターに「白い衣」を着て、この「若者」のようになりましょう、とお誘いしているのです。

教会によっては、礼拝奉仕者は皆、「白い祭服」を着ける習慣を受け継いでいることがあります。礼拝奉仕者ではなく、これから信者になろうという人が「白い祭服」を着ける習慣の教会もあります。「洗礼着」といって、洗礼を受けるとき身に着けるのです。

もともとは、古代教会で洗礼が執り行われるとき、志願者は身に着けているものをすべて外して水槽に身を沈められ、そこから引き上げられるという方式が取られていました。そして、水の中から引き上げられると奉仕者によって体を拭き清められて、真新しい白い服を着せられたのです。ちょうど赤ん坊が産湯に浸かった後、産着を着せられるように。着せられた真新しい白い服を着て、最初の一週間を教会で過ごしたとも言われています。真新しい白い服が、洗礼を受けた者のしるしでした。そして、これが、洗礼を受けようとする者が着けておく「洗礼着」という習慣になりました。

牧師となって二十数年、何十人もの洗礼式を執り行わせていただきましたが、残念ながら「洗礼着」を着けて洗礼に臨まれた方は一人もいらっしゃいません。そのような習慣の無い教会では、難しいかもしれません。その代わりに、わたしは必ず、洗礼式の中で志願者に「白い布」を渡してきました。最近では、洗礼式用に作られた「白布」を用意してお渡ししています。

洗礼をお受けになる方に、「白い衣」を着ていただきたいのです。あの「若者」のように。

教会は、洗礼に際して着せられるこの「白い服」は、「キリスト」のことだと教えてきました。今日の使徒書で、「洗礼」は「**キリスト・イエスに結ばれるため**」と教えている使徒パウロですが、別の書簡では、「洗礼を受けてキリストと結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている」（ガラテヤ 3:27）とも教えています。「キリストを着ている」から「あなたがたは皆…神の子」なのだと言うのです。あの「白い衣を着た若者」も、「キリストに結ばれて神の子」となった人なのでしょう。

さあ行こう！

それにしても、どうして「若者」なのでしょう。この「若者」が、名も個性もない天使ではないのだとしたら、いったい誰なのでしょう。主イエスのご復活を告げて、最初のイースターの祝いを弟子たちにもたらした人物が、その名も伝えられずに、ただ「若者」と呼ばれ、他の福音書では「天使」扱いられているのは、なぜなのでしょう。

今日朗読を聞いた福音書では、少し前の場面で、やはり名を記されない「若者」が登場しています。主イエスが弟子たちとの最後の晩餐とゲツセマネという所での最後の祈りを終えられた後、そこで当局の手下に逮捕され、連行されていく場面の中でのことです。「一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとすると、亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった」（マルコ 14:51~52）と描かれています。この「若者」は、他のどこにも描かれていなかったのですが、突然登場しました。そして、この「若者」とまったく同じ語で登場させられているのが、墓の中で主のご復活を告げた「白い長い衣を着た若者」なのです。

いったい、この「若者」は何者なのでしょう。確たる正解があるわけではありませんが、古くから教会では、この「若者」は、この福音書を著した人物か、その人物とも近い、初代教会では誰もが知っていたであろう人のことだろうと、考えられてきたようです。誰もが知っている「あの人」のことなのだけれども、あまりに重要な「天使」のような役割を担った人だったために、特定される描き方が憚られた、ということなのでしょう。

それにしても、逮捕され連行される主イエスについて行こうとしたのに、結局、裸で逃げてしまったというような、少し恥ずかしい話を伝える必要はあったのでしょうか。

あったのでしょう。「白い衣」を着て主のご復活を告げるようになる者も皆、同じようなことをしてきた者に違いないからです。いいえ、すでに洗礼を受けて「白い衣」を着た者となっているはずなのに、いまだに、その「白い衣」を脱ぎ捨てて、主イエスとは無関係であるかのように身を隠してしまうことのあるのが、わたしたち信者の現実かもしれません。

そうだとすると、わたしたちには、「白い衣」が確かに与えられているのです。キリストが与えられているのです。キリストが示してくださった生き方をもう一度やり直す「復活」のときへと、招かれているのです。

「さあ、行って、告げなさい。そして、あのお方が歩まれたところへ、行きなさい」。白い衣を着た若者は、今日、わたしたちにも、そう告げています。いいえ、皆さんがそう告げるのです。すべての人が、そうするようにと。すべての人が、自分の生き方をもう一度、新たにするようにと。